302 一時的肝静脈閉塞による^{99m}Tc-MAA 肝動脈血流シンチグラフィに及ぼす影響（基礎的検討）

金澤　右、安井光太郎、河野良寛、平木祥夫
（岡山大学放射線科）

一時的に肝静脈を閉塞した際に、肝動脈血流がどのように変化するかを^{99m}Tc-MAA 肝動脈血流シンチグラフィで基礎的検討を行った。実験動物として豚10匹を使用。セルジンガー法で留置した肝動脈カテ-テルより ^{99m}Tc-MAA 111～144.3 MBq を slow infusion し豚正常肝の肝動脈血流パターンを把握して対照とした。１週間後、肝静脈枝をバルーン・カテーテルで一時的(60分)に閉塞し、同様の操作を行ったところ、閉塞領域は非閉塞領域に比べ視覚的かつ数値的に著明なＲＩ高集積を示した。また、対照と比較しても同部のＲＩ集積は明らかに増加していた。一時的肝静脈閉塞による肝の病理組織学的変化も併せて検討し、動脈血流変化の機序について考察した。

303 肝動注療法におけるTc-99m MAAイメージング－体位による薬剤分布領域の変化について－

曽根康博，荒井保明，佐々木文雄，木戸長一郎
（愛知県がんセンター放射線診断部）

転移性肝癌１２例を対象として，Tc-99m MAA 370MBq を，臥位または座位にて肝動脈内留置カテーテルから極めて緩徐に注入後，４方向よりプラナー像を撮像し，両体位間での集積部位の差異について検討した．なお両検査間には１週間の間隔をおいた．９例（75%）で臥位と座位の画像間に何らかの差異を認め，うち４例（33%）では右葉と左葉，または肝と肝外の集積強度が臥位と座位で逆転する現象を認め，血流比の体位による逆転を反映していると思われた．以上より，ポンプ等による注入速度の緩徐な動注時には，体位によって薬剤分布が大きく変化している可能性が示唆された．

304 ^{99m}Tc標識スズコロイド、^{99m}Tc標識フチン酸を用いた動注、門注肝シンチグラフィ

井上優介，本田憲業，町田喜久雄（埼玉医大総合医療センター放射線科）　大嶽　達，白潮敏光，佐々木康人（東京大学放射線科）　澤田俊夫（東京大学第一外科）

肝腫瘍の予防または治療を目的とした動注、門注化学療法行う16例について、肝動脈内または門脈内に留置されたカテーテルより、^{99m}Tc標識スズコロイドまたは^{99m}Tc標識フチン酸111~222MBq(3~6mCi)を注入して、動注、門注肝シンチグラフィを施行した。^{99m}Tc標識スズコロイドを用いた動注、門注肝シンチグラフィ、および^{99m}Tc標識フチン酸を用いた門注肝シンチグラフィにより、肝内RI分布の不均一性、脾臓の描出、腫瘍に相当する低集積域とその周囲の高集積といった所見が得られ、動注、門注化学療法の有効性を確認する上で有用な検査方法と考えられた。

305 胆道閉鎖症における201-Tl経直腸門脈シンチグラフィ

金川公夫、西山章次（兵庫県立こども病院放射線科）
田中豊、北垣一、平田みどり、石井一成、井上善夫
山崎克人、松井律夫、河野通雄（神戸大学放射線科）
浜田俊彦（小野市民病院）

我々は胆道閉鎖症術後例22例に利波らの方法に準じて201-Tl経直腸門脈シンチグラフィを施行し、当院外科の臨床経過分類と比較した。Group1は、ほぼ完全に治癒状態と考えられるもの（８例）、Group2は、黄疸は早期に消失するが、肝細胞障害は長く遷延するもの（５例）、Group3は、黄疸、肝細胞障害とも長く続くもの（９例）である。それぞれのGroup の心肝比の平均と標準偏差は、0.25±0.12、0.45±0.12、0.90±0.17で有意差が認められ、経過観察に有用と考えられた。また、術前に本検査を施行し門脈圧を測定し得た５例についても検討した。

306 In-111 トランスフェリンを用いた炎症性腸疾患における蛋白漏出量の検討

成木行彦，瓜田純久，中谷尚登，平野盛久，大塚幸雄（東邦大学第一内科），野口雅裕（東邦大学放射線科），高野政明，丸山雄三（東邦大学大森病院中放核医学室）

In-111 を自己のトランスフェリン（Tf）と結合させ静注し，炎症性腸疾患の蛋白漏出量を検索し，臨床症状および他の検査結果との関連について検討した。対象はクローン病（CD）6例，潰瘍性大腸炎（UC）5例で，方法は患者血漿15㎖とIn-111 Cl 3mCi（約0.5㎖）を室温で1時間インキュベーションし，静注後72時間の蓄便中の放射能を測定し，静注全放射能に対する百分率を求めた。炎症性腸疾患の蓄便中の放射能は4.05±1.59％（Mean±SD）で，対照群に比べ増加していた。CDの蓄便中の放射能は4.01±1.94％であり，UCは4.09±1.27であった。蛋白漏出量と排便回数，炎症反応，病変の広がりとは関連があった。

307 In-111 トランスフェリンシンチグラフィーの胃癌での検討

中谷尚登，成木行彦，瓜田純久，平野盛久，大塚幸雄（東邦大学第一内科），　野口雅裕（同放射線科），高野政明，丸山雄三（中放核医学室）

胃癌患者にIn-111 トランスフェリン（Tf）を用いた蛋白漏出試験を施行し、胃癌における蛋白漏出について検討した。対象は進行胃癌9例、早期胃癌2例の計11例。In-111Cl 2mCi(0.5ml)と患者血清15mlを室温でincubation後、静注し、ガンマカメラで経時的に腹部前面像を撮像した。In-111Tf静注後72時間の蓄便中の放射能を測定し、静注全放射能に対する百分率で表した。11例の便中への漏出は平均3.93±4.25%であった。Borr-４型の４例は平均6.92±4.27%と高値であった。４例ともIn-111Tf 静注直後から、胃大彎の輪郭に沿ったIn-111の集積が認められた。蛋白漏出の程度は胃癌病変部の面積と比較的相関した。

Presented by Medical*Online